2020年3月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第518号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

「命の村政」が語り続けるもの――///☆★☆

『満洲分村移民を拒否した村長』佐々木忠綱を追究して

文・現代史研究者（元長野県立高校校長）　大日方 悦夫

無名の人、佐々木忠綱の思想と行動の軌跡をまとめた本

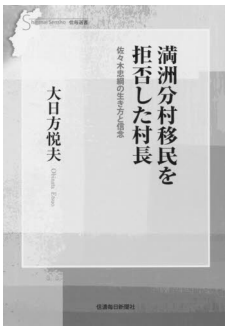
2018年夏、信濃毎日新聞社から『満洲分村移民を拒否した村長―佐々木忠綱の生き方と信念』と題する本を出版した。戦前、長野県の一寒村の村長として満洲（現在の中国東北地方）への分村移民を拒んだ佐々木忠綱の思想と行動の軌跡をまとめたものだ。満洲移民をテーマとした本としては「異色」であり、佐々木村長も全国的には無名の人であったから、はたしてどのくらいの人に手にとっていただけるのか、著者としてはかなり不安を抱きながらの出版だった。

不安は杞憂だったようで、出版されると予想以上の反響があった。県外の新聞等にも紹介していただいたこともあり、反響は県内に限らず全国から届いた。担当編集者の同社出版部・内山郁夫さんによると「爆発的な普及状況ではないけれど、一定のペースで途切れることなく出ている」とのことで、同部に寄せられた愛読者カード（はがき）も見せていただいた。いくつか抜粋して紹介する。

予想以上の反響、愛読者カードより

埼玉県のAさんから。「満洲分村移民を実行しなければならなかった当時の流れを見定め、反対の行動を実行できた佐々木忠綱村長の存在に驚きました。大きな流れにも流されず、賢く正しい生き方をできた人として大いに尊敬します」

鹿児島県のBさんから。「今、感動の中で読み終えた。著者の多くの資料の駆使と分析力に共感。私の中では数少ない名著のトップ級に位置する。昨年訪ねた記念館（満蒙開拓平和記念館のこと、引用者）、旧大下條村付近を歩いてみたくなりました。長野のリンゴを食べる時に、必ず思い出すと思われる内容。著者と貴社に感謝の気持ちで一杯です」



【満洲分村移民を拒否した村長　佐々木忠綱の生き方と信念】信毎選書２７／大日方悦夫著／信濃毎日新聞社開発局出版部刊／2018年8月発行／ISBNコード978-4-7840-7333-7／税込価格1,320円

そして長野県のCさんから。「国策として進められる大きな流れに掉さした佐々木村長の信念が青年時代の自由大学の学びや交流の中にあったのではないかということ。今の世の中で自分の行動の判断基準をどこに求めればよいのか考え続けていますので、『良心』とは何か、改めて考えました」

同じく長野県のDさんから。「文がわかり易い。多くの文・説を切り落としたのだろうが、主脈は一本通っており、難解な昭和近代史を頭に入れるためのストーリーがよく分かる。満蒙関係でなく、明治から戦前を勉強したい方への入門書としてもお勧めしたい」

愛読者カードは北海道や東京、兵庫、鳥取からも届いた。このほか著者あての手紙やメールも寄せられた。いずれも感想や質問、さらに今後の研究への期待や激励など、私にとっては嬉しいものばかりだった。

「第32回地方出版文化功労賞・奨励賞」など二つの団体から表彰を受ける

さらに今年に入って、二つの団体から表彰していただいた。一つは長野県飯田市にある飯田市歴史研究所の「2019年度飯田歴研賞・著作賞」、もう一つは鳥取県のブックインとっとり実行委員会の「第32回地方出版文化功労賞・奨励賞」だ。

前者は、飯田・下伊那の地域史研究に貢献した著作として評価していただき受賞となった。飯田・下伊那は戦前から長野県内でも歴史研究・地域史研究が盛んな地域で、その歴史と伝統は現在も脈々と受け継がれ、多くの研究成果が生み出されている。特に満洲開拓史研究の分野では、多くの移民者を送り出した地域として体験者からの証言収集など地道な取り組みが続けられ、その成果は数多く出版物となって世に送り出されてきた。

こうした研究活動をけん引しているのが飯田市歴史研究所だ。飯田・下伊那に縁のない私にとって、終生同地にあった佐々木忠綱を描くことは、ある意味で「勇気」のいることだった。それだけに今回の受賞は、嬉しく、そして光栄だった。早速、佐々木家の３人

のお子さんに「歴研賞」受賞をお伝えした。

後者の「ブックインとっとり」は、1988年に鳥取県で生まれた文化活動だ。始まったいきさつと趣旨について、要項は次のように説明している。

「地方文化のバロメーターのひとつとも言われる地方での出版活動。『ブックインとっとり』はその重要性に目を向け、東京23区と鳥取県を除く地方の出版社を対象に優秀な出版作品を鳥取県内で展示し顕彰してきました。東京一極集中のなかでともすれば沈滞しがちな地方出版への激励や奨励として、国内外から高く評価されています」

受賞の一報を内山さんから伝えられた時、私は「ブックインとっとり」のことを全く知らなかった。第32回地方出版文化功労賞は、全国の地方出版物約350点の中から推薦・投票により選び出し、最終候補作10点を10名の審査委員が持ち回りで数ヵ月にわたって審査し、最終審査会で決定したという。今年は、奨励賞2点と特別賞1点が選ばれた。

内山さんから「地方文化、地方出版にとって歴史のある貴重な取り組み。ぜひ授賞式に出席を」と後押ししていただき、11月初旬、倉吉市立図書館で開催された表彰式と受賞記念スピーチに臨んだ。

「忘れがちな事実を世に知らしめた事の意義を高く評価」される

表彰式では、齋藤明彦審査委員長から審査報告があった。本の構成から内容へ、そして佐々木村長が分村移民を拒否した理由・方法・背景へと、時には鋭い指摘も含めながら、選考理由を説明された。そして「苛烈な時代にあってもこうした村長がいたということは驚きであり、満洲移民の戦後の悲劇的状況さえ遠くなりつつある現代で、忘れがちな事実を世に知らしめた事の意義を高く評価した」と締めくくられた。著者にとって執筆の労が報われた瞬間だった。

受賞スピーチでは、満洲移民を拒否した背景と佐々木村政の柱をとなった医療と教育への思いについて話した。いくつかの質疑応答の後、司会の上田京子さんが佐々木村政を一言にまとめられた。それが「命の村政」だった。胸に落ちる言葉だった。

鳥取への旅は、表彰式のほかにも、地域にしっかりと根をおろして出版・文化・教育活動、そして住民運動に情熱を燃やす人々との出会いもあった。本を通しての出会いと結びつき。貴重な体験の場を与えてくれた「ブックインとっとり」に感謝しつつ、鳥取を後にした。

少ない資料のなか、村民の命を救った事実が私の心をとらえた

ところで、佐々木村政を評して「命の村政」と言ったひとことが「胸に落ちた」と書いた。それは読者の思いを集約した言葉だったと思うが、今振り返ってみると、書き手の私が四半世紀にわたって忠綱の事績を追い求めてきたのも、同じ気持ちからだったと思う。

私が、佐々木忠綱に関心を持ったのは1993年のことだった。『長野県史』の一節に満洲分村移民に村民を送らなかった村長として紹介されていた。わずか数行の記述だった。しかし、戦争の時代にあって「国策」として進められた満洲開拓に対して、その本質を見抜き、自分にできるギリギリの一線を護って村民の命を救った事実は、私の心をとらえた。戦争は止めなければいけない。しかし、時代の流れを押しとどめることができず、「命」の分岐点に立った時、目前の「命」を救うことが果たしてできるのだろうか……。

疑問を持ちつつ、県史を執筆した上條宏之さんにうかがったところ、まだ誰も研究していない分野とのこと。そこで疑問に対する答えを得るため、忠綱を追究する旅を始めることにした。しかし、史料収集に着手したもののほとんど史料らしきものが残されていない。考えてみればあたり前のことで、国策を推進した史料や反対して弾圧された史料は残っているものの、国策を推進する立場にありながら押しとどめた事実は記録されず、残されてもいないのが一般的だ。そこで証言や他の史料をつなぎ合わせながら、一歩一歩、追究の作業を続けた。

四半世紀が過ぎた。時代は「戦前に類似」とも言われるようになっていた。今回、縁あって信濃毎日新聞社に出版の意義を理解していただき、内山さんに全面的にバックアップしていただいて一冊の本となった。

執筆中、私は四半世紀前の自分の疑問に対する答えを考え続けていた。そして本にも書いたが、戦中のリトアニアでユダヤ人にビザを発給し続けた杉原千畝の姿と信州の小村で分村移民を拒否し続けていた忠綱の姿が、なぜか度々重なった。

杉原の「命のビザ」と、忠綱の「命の村政」。

目の前で消えるかもしれない「命」を救うため、人としてとるべき道。「命の村政」は、そのことを今も語り続けている、と私は思っている。

紙数が尽きた。佐々木忠綱を調べていく中で、他の村にも分村移民を拒んだ村長の姿も見えてきた。今後、機会があればそれらの村長も紹介していきたいと考えている。

＊

（おびなた　えつお／現代史研究者・元長野県立高校校長）

地方・小出版流通センターＨＰのご案内

弊社のホームページでは半年前までの本誌バックナンバーをアップしております。
また「新刊ダイジェスト」のバックナンバーもたくさん掲載してます。
アドレスは下記の通りです。右記のＱＲコードもご利用ください。
URL：http://neil.chips.jp/chihosho/

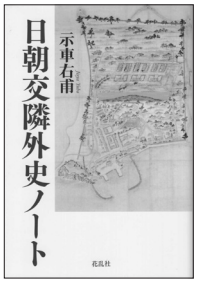
◇

毎日の新刊情報や近刊情報なども提供しております。
併せてご参考になさってください。

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『日朝交隣外史ノート』●示車右甫著



隣国であるだけに、日本と朝鮮は古くから交流を続けてきました。本書は主に前近代の日本と朝鮮の交流を一冊にまとめたものです。倭寇の隆盛や豊臣秀吉の朝鮮侵略など、両国の間に大きな傷を残す出来事が中世にはありました。それに比べると江戸時代は朝鮮通信使の往来もあり、平穏な時代だったと言えます。本書は大部分をその江戸時代の両国の交流に割いています。干戈を交えることはなかったものの、江戸時代の交流も一筋縄ではいきません。小中華的な思想から日本を低く見る朝鮮と、朝鮮を神功皇后の時代の属国とみなすこともある日本の意識の間には齟齬がありました。新井白石や松平定信らが朝鮮通信使を迎えるにあたって、儀式や書札例を改めようとしますが、意識のずれが対立を引き起こします。そしてその間では雨森芳洲ら対馬人士が奮闘していました。一方で日本の文人は朝鮮を学芸の先進地として通信使に漢詩を見てもらうことを喜び、通信使たちも水車やサツマイモなど日本の優れたものを取り入れようとするなど、お互いの優れた点にも目を向けていました。　しかし明治の世を迎えると明治政府は欧米列強にされたことを朝鮮に行おうとします。もはやそこには対等な交流を続けるという意識は失われてしまいました。隣国との交流は距離が近しいだけに時に色々な感情が渦巻くものですが、侮りの気持ちをもって望むことは常に戒めなければならないと強く感じさせます。

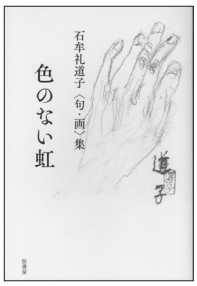
◆ 2200円・四六判・414頁・**花乱社**・福岡・202001刊・ISBN9784910038124

『戦乱でみるとちぎの歴史』●江田郁夫著

本書は、「戦乱」をキーワードに栃木の歴史を古代から近代にかけて辿りながら、現代さらには未来について展望していくことを主眼にしている。古代の下野国は、奥羽地方と中央政権との結節点に当たっていた。このことが後に至るまでこの地域には重要なファクターとなった。また、「俘囚」などの群盗が跋扈しており、かれらは馬に関して高度な技術・技能を有していた。武士が誕生する素地が醸成されていた。やがて10世紀になると平将門の乱を平定した藤原秀郷が登場。彼は半ば伝説化・英雄視され、後世の東国武士たちの精神的支柱となる。その後、源義家や源頼朝などの武門の棟梁のもと、中小の武士団が形成されていく。鎌倉期以降、秀郷流系の嫡流・小山氏や宇都宮氏、那須氏などが中世を通じて興亡を繰り返し戦乱が相続く。近世になると表立った戦乱はなくなるが、執筆者が述べているように「戦乱の逆の達成点」であるとの指摘は示唆に富む。戦乱と平和とは裏表の関係にあることを再認識させられる。また、日光東照宮造営がこの地に与えた影響も大きい。古代の東山道、中世の鎌倉街道中道（奥大道）、近世の奥州道中に加え、新たに日光道中が重要な幹線道路となった。とくに宇都宮は日光、奥羽、江戸との間を人やモノが往来する交通の要衝であり、近代になると関東有数の軍都となる。平易な文章とカラフルな図版や地図などが豊富に掲載された本書は、大変読みやすい体裁となっており好著といえる。

◆ 2500円・A5判・191頁・**下野新聞社**・栃木・202002刊・ISBN9784882867456

『石牟礼道子＜句・画＞集　色のない虹』●石牟礼道子著



本書は『石牟礼道子全句集』（藤原書店）刊行後の二〇一六年四月から亡くなった二〇一八年二月までの約二年間の毎月、読売新聞西部本社版に連載された石牟礼道子最晩年の二十一句とその自句自解、および自筆の絵、さらには『全集』等に未収録の三十一句を加えた〈句・画〉集である。冒頭の二十一句は担当記者の方が石牟礼さんの入所する熊本市の老人ホームに足繁く通うなかで生み出された。〈渚にてタコの子らじゃれつく母の脛〉のように幼年の頃の原郷の風景から紡がれた句が多い。

その中の一句に〈きょうも雨あすも雨わたしは魂の遠ざれき〉がある。自解文によると遠ざれきとは九州の方言で、魂がさすらって行方不明になるという意味だという。精神を病んでいた祖母の孤独へと寄り添った子どもの頃の記憶から紡がれた。ここで特徴的なように石牟礼さんの句は、自由で作為がなく、有季定型や客観写生といった俳句の不文律に頓着して言葉をこねくり回すようなことはしない。自解文においても「俳句は破調しています。私の穏やかならざる心が、素直に出たからだと思ってください」と言っている。だから「自分のことを俳人などとは露思ったことがない。いささか気がおかしい人間の頭に湧くイメージだから、俳句になっているかどうか知らない。」（『全句集』あとがき）とも言うわけだが、石牟礼俳句には、 紛れもなく俳句としか言えない豊饒な沈黙があるのである。

◆ 1900円・四六判・171頁・**弦書房**・福岡・202002刊・ISBN9784863292000

『今日は誰にも愛されたかった　谷川俊太郎　岡野大嗣　木下龍也』●谷川俊太郎 / 岡野大嗣 / 木下龍也著

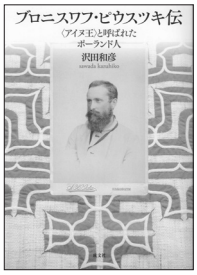
国民的詩人・谷川俊太郎と共に80年代生まれの気鋭の歌人、岡野大嗣と木下龍也。この三人が“連詩”で絶妙な化学反応を起こした。そもそも連詩とは、五七五または七七の詩句を連ねる古典の「連歌」「連句」の流れを汲んで、複数の詩人が同じ場に集い数行の詩を交互に書き連ねていく詩の形式のこと。本書では三人がそれぞれの場で、全てメールでやりとりし、一編一首に三日をかけて制作。全部で36編から成り、谷川俊太郎が半分の18編、もう半分を岡野大嗣と木下龍也の歌人側で9首ずつ作った。完成後、谷川宅で本書編集部が進行役となり、創作中の読み合いや読み違いを本人たちで語り合う「感想戦」も収録。

岡野大嗣の“ベランダに見える範囲の春になら心をゆるしても大丈夫”から始まり、谷川俊太郎の“火で終わるのも水で終わるのも災害の一語ではくくれない　戻らない人々を祝福するために俗に背いて詩骨をしなやかに保つ”で終わる連詩。前作のどこを受けて次作が出来たのか、その斬新な発想に舌を巻く。Siriを尻で受けるユーモアもあるが、ラストは震災という日本の現状も取り入れ、より深い世界が広がっている。

タイトルは岡野大嗣の歌から引用された。そのいきさつも含め、終始笑いのたえない感想戦の様子が伝わってくる。“読み返すと、我々三人を差し置いて日本語というコトバが勝手に書いたと思う”という谷川俊太郎のあとがきが満足度を物語っている。

◆1200円・170mmx108mm判・167頁・**ナナロク社**・東京・201912刊・ISBN9784904292914

『ブロニスワフ・ピウスツキ伝 －アイヌ王と呼ばれたポーランド人』●沢田和彦著



ロシア領リトアニアに生まれたピウスツキは、大学在学中にロシア皇帝暗殺未遂事件に連座し、15年のサハリン島流刑に処せられる。失意と苦役の断末魔の中で、いつしか日露両国から苦しめられる先住民と交流を深め、彼らを支援し、民族学研究にのめり込んでいく。やがて樺太アイヌの娘との間に二児をもうけるが、刑期終了後に離別して日本に渡り、二葉亭四迷らの知遇を得て、祖国リトアニアとポーランドの統合に奔走する。長崎から米国に出港し、大陸を横断してパリに行きつく。だが運動は理解を得られず、心を病み、志半ばでセーヌ河に身を沈める。この数奇にして壮絶なる生涯を、日・露・ポーランド・英各国語の膨大な資料（巻末の参考文献リストはピウスツキの著作を含み35頁に及ぶが、それでも全てを網羅したものではないとのこと）によって詳解した我国初の評伝である。　ピウスツキは、当時最先端の写真機と蝋管蓄音機を駆使して貴重な民族記録を収集し、多くの論考を残した。

しかし、妻子のことなど東洋での私的な回想を書くことはなかったという。著者は、ピウスツキはもとより、同時代を生きた関係者の書簡や未刊文書までも丹念に掘り起こし、その人となりを浮かび上がらせていく。随所に掲げられた写真も印象的で、とりわけ、後年北海道に移り住み、元夫の死も知らず、盲目となって60年近い人生を永らえたアイヌ人妻の孫娘を抱く姿には胸を打たれる。

◆4000円・A5判・398頁・**成文社**・神奈川・201912刊・ISBN9784865200409

地方小出版流通センター　ジャンル別 新刊案内

2020年1月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　０２　ｖｏｌ．６６２　プレスアート編　298mm × 232mm　143頁　４５０円　プレスアート［宮城］　978-4-503-21974-9　20/02

◆**ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ**　４８１　２０２０年１月号　廣瀬仁編　Ａ４　192頁　２５４６円　地域環境ネット［埼玉］　978-4-909864-13-0　20/01

◆**子どもと昔話**　Ｎｏ．８２　小澤俊夫編　Ａ５　63頁　７９０円　小澤昔ばなし研究所［神奈川］　978-4-902875-96-6　20/01

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．５９６　２０１９年１２月号　伊藤玄二郎編　Ｂ６　88頁　２９５円　かまくら春秋社［神奈川］　978-4-7740-0794-6　19/12

◆**書２１**　Ｎｏ．６８　澤田博史編　Ａ４　96頁　２０００円　匠出版［神奈川］　978-4-925212-77-9　19/12

◆**道**　Ｎｏ．２０３　木村郁子編　Ａ４　74頁　１１４３円　どう出版［神奈川］　978-4-910001-04-3　20/01

◆**児童文芸**　２０２０年２－３月号　高橋うらら編　Ａ５　112頁　８００円　あるまじろ書房［東京］　978-4-904387-25-2　20/02

◆**レコード・マネジメント**　Ｎｏ．

売行良好書

期間：2020年1月15日～2月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『医者、用水路を拓く』1800円・石風社　(2)『おはなし　聞いて語って』1364円・東京子ども図書館　(3)『イージス・アショアを追う』1600円・秋田魁新報社　(4)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(5)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(6)『明智光秀ゆかりの地を歩く』1500円・サンライズ出版　(7)『報道写真集　首里城』1000円・沖縄タイムス社　(8)『ジソウのお仕事』1800円・フェミックス　(9)『柳家喬太郎バラエティブック』1637円・東京かわら版　(10)『甦れ！首里城』1000円・琉球新報社　(11)『死因「老衰」とは何か』1800円・南方新社　(12)『石牟礼道子全詩集　完全版』3500円・石風社

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『本を売る技術』1600円・本の雑誌社　(2)『東京かわら版　２月号』545円・東京かわら版　(3)『北海道いい旅研究室　１７』773円・海豹舎　(4)『本の雑誌　４４１号』667円・本の雑誌社　(5)『ねむらない樹　ｖｏｌ．４』1500円・書肆侃侃房　(6)『着せる女』1650円・本の雑誌社　(7)『奥武蔵登山詳細図全１３０コース』900円・吉備人出版　(8)『たやすみなさい』2000円・書肆侃侃房　(9)『今日は誰にも愛されたかった』1200円・ナナロク社　(10)『医者、用水路を拓く』1800円・石風社

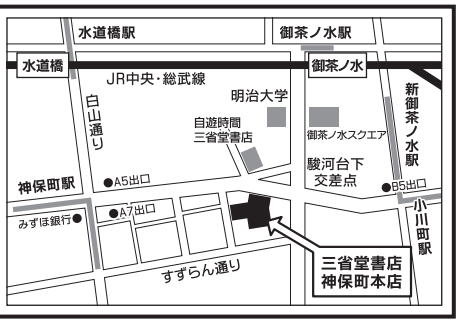
［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『医者井戸を掘る』1800円・石風社　(2)『医は国境を越えて』2000円・石風社　(3)『ダラエヌールへの道』2000円・石風社　(4)『ペシャワールにて　増補版』1800円・石風社　(5)『戦乱でみるとちぎの歴史』2500円・下野新聞社　(6)『里帰りした「玉野市電」』1000円・吉備人出版　(7)『北海道いい旅研究室１７』773円・海豹舎　(8)『辺境で診る　辺境から見る』1800円・石風社　(9)『医者井戸を掘る』1800円・石風社　(10)『自転車大好き　創刊準備号』500円・ブックショップ「マイタウン」　(11)『尾張の戦国時代２』2000円・ブックショップ「マイタウン」　(12)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼「なんとしても子どもたちにおはなしを届ける人を増やしたい、そのためにはまず大勢の人におはなしがどんなものか知ってもらいたい」という強い願望のもとに、大人のためのお話会が計画され、いまから47年前の1972年の１月に東京子ども図書館の「月例お話会」が２ＬＤＫのアパートの一室で始りました。１年後にお客が増えたところで事務所と同じ階にもう一部屋を借りて、最初はろうそくは使わずフロアースタンドの明りでおはなしをしていました。プログラムも自分の持ち話をつぎつぎに語るだけで、バランスや色どりを考える余裕はありませんでした。第１回から47年、500回を迎えました。後にはじめた「昼のお話会」も100回を迎えました。たくさんのお話が初めて訳されたり、再話されたりして、月例お話会で試され、その後つぎつぎに語りのテキスト『おはなしのろうそく』に収められて大勢の語り手たちのレパートリーになっていきました。月例のお話の会は、おはなしの新しいテキストを送り出すきっかけもつくってきたのです。そのプログラム集が発行されました。東京子ども図書館編・刊『**おはなし聞いて語って**』1,365円（ISBN978-4-88569-215-4）です。１～500回の全プログラム（お話の題名・出典・語り手）を収録。カラー口絵、東京子ども図書館・松岡享子名誉理事長のまえがき、話名索引、出典リストから成っています。松岡さんは、「お話の会」が東京子ども図書館一館のものでなく、全国の語り手たちの”共有の場”として発展してゆくことを希望しています。物語を語るという営みは、歴史が古いだけでなく、これからの社会に働きかけることのできる潜在的な力をもっていると言います。（地方・小出版流通センター通信　No.1435より）

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店
BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。